Duplication と Reversal

―― *The Golden Bowl* におけるマギーとシャーロットの関係 ――

山　口　志のぶ

序

Henry James は"The Art of Fiction" の中で文学を "the search for form" するものと見なしている。[1] このようなジェイムズの形式追求の姿勢は彼の後期の作品により強く顕れていることは周知の事実である。この問題に関して、晩年のジェイムズをよく知る Edith Wharton はジェイムズの形式や構造への固執から生じる弊害を指摘している。[2] ウォートンによるこの指摘を引用して、F. R. Leavis もまたジェイムズの後期の作品にみられる技法上の執念が彼の小説から生気を奪ってしまったと述べている。[3]

しかしながら、小説における形式や構成の洗練は作家ジェイムズの追い求めた一つの理想であることは否定できない。また彼は形式という外観の完成のみに労力を費やしたのではない。彼にとって小説の主題すなわち "the idea" と "the form" は「針と糸」のように分かちがたい関係であった。[4] この点において、*The Golden Bowl* は、ジェイムズ自身が New York 版の序文の中で *The Ambassadors* と共に高く評価した作品である。[5]

この問題に関して J. A. Ward はジェイムズの小説の形式について論じた研究書の中で、*The Golden Bowl*に用いられた技法と構成を "duplication" と "symmetrical"という語を用いて解説している。[6] 確かにこの作品における舞台と出来事は重複しており全体としてシンメトリーの外観を呈している。一方、ウォードが考察の対象としていない象徴やイメージの点からこの問題を考察すると、その解釈とは異なった結論が導き出されるように思われる。

この点に留意して、本論では *The Golden Bowl*に用いられた技法と構成を"duplication" と "reversal" として検証し、概して評価の分かれる主人公 Maggie Verver と Charlotte Stant の人物像とこの小説に描かれている彼女らの経験と道徳の問題ついて論じたい。[7]

1. 歪んだ真珠

The Golden Bowl は、主人公 Maggie Verver と Prince Amerigo、マギーの父親である Adam と Charlotte という二組の夫婦を中心に、主人公の夫と父親の妻の不道徳な関係と、それに気づいた主人公が父親を気遣いそれを公にすることなく夫婦の真の結びつきを取り戻すまでを描いた物語である。

彼らが遭遇する一連の出来事の原点に立ち返ってみると、主人公の腹心の友である Mrs. Assingham が「マギーが"vicious circle" (I:394)を生み出したのだ」と指摘しているように、それは主人公の誤った"arrangement" (II:5)に帰する。その取り決めとは彼女によって厳格に定められた「過去と決別することなく結婚する」という規則である。[8]

それは母の死後、父親と二人で暮らしてきたマギーが自身の結婚と同時に一人になる父親への配慮から、いわば高徳な態度に端を発したものであったのだが、父親の再婚後も独

身時代と変わらずに父親と過ごし、夫と義理の母親に社交の一切を押し付けたことに誤りがあったように思える。つまり、父親たるアダムがマギーに辛くも示唆しているように、その取り決めは親子の間では "moral" (II:92)であっても、互いの伴侶を含めた家族の視点からみれば "selfish" (II:91) なのである。この点に関してジェイムズは創作ノートの中でヴァーヴァー親子の関係を「異例なほどの強い執着」と説明している。[9] しかし、アダムの言葉が示すとおり、彼はその弊害に気づいていたのに対し、マギーは一児の母となり父親の結婚後二年を経過してもそれに気づかずにいたことに問題があったと考えられる。

さらに言えば、マギーはそれを暗黙のうちにアダムに押し付けていたのである。これに関してアシンガム夫人は"She [Maggie] made him [Adam], she *makes* him, accept the tolerably obvious oddity of their relation, all round, for the part of the game." (I:398) と指摘している。父親が彼女の取り決めに従うということは、結局のところ家族全員がそれを強いられるという結果になる。*The Golden Bowl* における物事はこのような因果律に支配されている。

アダムはマギーの性格の中に"nun" と "nymphs" (I:188)の二つの面を見いだしているが、自らの過ちに気づくまで彼女は美徳の館から決して外出しない尼僧であり続け、世俗の悪の存在を認めようとしなかった。その結果、自身の中に存在する "arrogance and greed," "duplicity," "hypocrite" (I:16) といった遺伝的資質から救済されたいと願う夫と心を通わす機会を失ってしまったのである。小説の創作に関して「ある特定の性格を持った人物にそれに相応しい主題と要素を付け加えて小説を創る」[10] とジェイムズ自身が述べているように、*The Golden Bowl* における忌まわしい出来事の発端は彼女のこのような性格にも起因する。

これに関して、トランプに興じる家族の様子を眺めながらマギーは、アダムとシャーロットならびにアメリーゴに対する自身の態度を"the dire deformity of her [Maggie's] attitude" (II:240) と表現している。この点に留意して、"pearls" (I:338) の目利きであるアシンガム夫人がマギーを宝石に例えていることを考え合わせると、ある特定のイメージを導き出すことができる。それは「歪んだ真珠(the baroque)」である。つまり、マギーは素晴らしい素質を持ちながらも、どこかバランスを欠いているのである。おそらく彼女の母親が "faith" の "application" (I:149)を誤ったように、彼女もまた道徳的感覚の適用を誤ったのだと考えられる。

マギーの人物像に関して Quentin Anderson は "innocence and love" というエンブレムを与えているが、[11] 先に述べたようにマギーは"num"と"nymph [nymphs]" (I:188) という相反する性質を内包しているためにマギーを完全なる救済者として寓話的にテキスト解釈することは困難である。Viola Hopkins Winner が擬えているように、夫と父親への愛情の狭間で葛藤するマギーの姿は "moral labyrinth"に迷い込んだ高徳な娘が相応しいと思われる。[12]

ジェイムズはこの「歪んだ真珠」のイメージをマギーとは性格も個人的背景においても相反するシャーロットにも付与している。マギーが大富豪の父を持つ道徳的なアメリカ娘であるのに反して、シャーロットは財産のない孤児でありヨーロッパ化したアメリカ人の世慣れた娘であるからだ。

シャーロットは母国アメリカでの結婚相手の獲得に失敗しロンドンへ戻ってきた。そこで自分とは対照的に友人であるマギーが自分のかつての恋人と結婚することを知る。しかし、のちに父親の孤独を慰めるというマギーからの依頼が機となって、彼女自身もマギーの父親アダムと結婚することになる。シャーロットの結婚の障害は、妻である彼女が入り込めないほどヴァーヴァー親子が常に行動を共にしていることではないだろうか。

シャーロットはアシンガム夫人に自身の立場を次のように打ち明けている。"I'm [. . .] fixed as fast as a pin stuck up to its head in a cushion. I'm placed – I can't imagine any one *more* placed. There I *am*!" (I:256) 彼女はマギーが"arrangement" (II:5)による自分の立場を「知った」のである。[13] そこでマギーが暗黙のうちに彼女に強いた「過去と決別することなく結婚する」という取り決めを逆手に取り、与えられた自由な立場を精一杯利用しようと「取り決め」たのである。[14] シャーロットの過ちはそれが節度を越してアメリーゴとの不道徳で利己的な行為にはしってしまったことにある。つまり、彼女もまたマギーと同様に自由な立場に関する"application" (I:149)を誤ってしまったのだと言える。

ここで考慮すべきは、彼女がこの不道徳な行為を行使するまでの二年間は、少なくとも社交嫌いの夫と義理の娘のために彼女は自分に割り当てられた義務を果たしてきたことである。したがって、彼女をまったくの悪人として解釈することはできない。すべてはマギーの作り出した悪しき循環の影響を受けているからである。

ジェイムズがシャーロットに「歪んだ真珠」の称号を与えているのは、ヴァーヴァー親子の住い the Fawns に陳列されている陶器をシャーロットが来客たちに解説する場面である。この時、彼女はその中の最も大きな作品について" though the whole thing is a little *baroque* its value as a specimen is I believe almost inestimable." (I: 291) と説明している。[15] マギーはこの様子を戸口の陰から垣間見て、不道徳な行為の代償として働かされているシャーロットが今にも泣き出しそうになっていると感じる。

この"baroque"という用語に関して、この文章における訳は「奇異な」といった表現が妥当であると思われる。しかしこの言葉が「(真珠が) いびつな」という意味を併せ持つことに注目すれば、ジェイムズがマギーに付与した「歪んだ真珠」のイメージをシャーロットにも与えていることは明らかである。そして彼女の「歪み」はマギーが道徳的であろうとして我利に陥ったのとは反対に、アメリーゴとの利己的な裏切り行為を「神聖な」行為ととしてしまったことにある。[16]

さらに、ジェイムズは「歪んだ真珠」というイメージをこの家族の全体の象徴として用いた可能性もある。それは彼ら全員が一つの画面に納まる構図を備えた場面、すなわち

Portland Place のバルコニーからアメリーゴとシャーロットが公園から戻ってくるマギーとアダムたちに手を振る場面と関連する。問題となるのは彼らが散歩にでかけた公園である。この公園でアダムはマギーに自分たち親子の親密すぎる関係がそれを容認しているシャーロットや公爵の犠牲の上に成り立っていることを示唆する。さらに、彼は"we're [Adam, Maggie, Amerigo and Charlotte are] selfish together – we move as a selfish mass."(I: 91)と指摘するのである。公園の場面は第一部でもアシンガム夫妻の住いである Cadogan Place から近隣の Hyde Park へ出かけるシャーロットとアメリーゴの姿が描かれているが、ポートランドプレイスから徒歩でいける距離を考慮に入れれば、この場面でアダムとマギーたちが出向いたのは Regents Park であろうと推測できる。

それでは、この場所と「歪み」という言葉がどのように関連しているのだろうか。ジェイムズがこの作品を創作した当時の地図によれば、Regent Park は不完全な円形をなす outercircle と真円でありながら様々な施設が付属して歪んでみえる inner circle で構成されていることがわかる。[17] したがって、ジェイムズがシャーロットとアメリーゴをバルコニーに立たせ、ヴァーヴァー親子一行がその様子を見上げるという三次元的な視点を採用したことは、読者の意識を下からのみならず上から公園の全体像を眺めるように促し、この公園の歪んだ円形と主人公たちの結婚とを結びつける役割を果たしているようにも思える。

この問題については、ジェイムズと視覚芸術との関係および作品中に用いられた視覚芸術について研究を行なっている Adeline R. Tintner や Viola Hopkins Winner およびジェイムズの作品に織り込まれた象徴やイメージに関して考察を行なっている代表的なジェイムズ研究書では言及されていない点のように思われる。

以上のように、ジェイムズは「歪んだ真珠」のイメージをマギーとシャーロットの双方に付与し、結婚生活を偽りのものとしてしまう彼女らの精神的不完全さ、あるいは利己心を表している。さらに彼はその適用方法を変化させて繰り返し用いているのである。

2. 金色の盃：結婚と知識

ジェイムズは当初この小説の題名を *The Marriages* としようと考えていた。[18] しかし、その題名はすでに他の作品で使用していたため *The Golden Bowl* となった。このことからも明らかなように、この小説の主題を明確に表している「金色の盃」はシャーロットとマ

ギー、双方の結婚の象徴として用いられ、彼らのひび割れた、あるいは歪んだ関係を示唆している。

まず第一部で「金色の盃」はシャーロットとアメリーゴとの再会の場面に登場する。この時、彼女はかつての恋人であるアメリーゴとマギーの結婚祝いとして、ユダヤ骨董商で見つけた「金色の盃」を二人に贈ろうと考える。彼女は金に覆われて外側からは見えないこの盃の「ひび」について店主から聞きながらも、それを贈ろうとするそぶりをみせる。しかし、財産のないシャーロットには値段の折り合いがつかず購入に到らなかったのである。貧しいシャーロットが財産を必要とする貧乏公爵のアメリーゴと結婚できなかったことを考慮すれば、この盃は F. C. Crews や F. O. Matthiessen が指摘するように、彼女とアメリーゴとの叶わぬ結婚の象徴であろう。[19] 同時にそれはマギーとアメリーゴの傷の入った結婚の象徴ともなる。したがって、盃の「ひび」はシャーロットとアメリーゴとの不倫の関係を示唆したものと考えられる。

次に、シャーロットが買えなかったその盃は、第二部で偶然にも父の誕生日祝いとしてマギーによって購入され再び物語に登場する。皮肉なことに彼女はそれに完璧なる理想の結婚の象徴を見いだしていたのである。しかし、それは父親に贈られる前に、ひびの入った盃を高値で売りつけたことへの謝罪に訪れた店主が、シャーロットとアメリーゴが旧知の仲であることを示唆したことで、マギー自身の偽りの結婚の象徴となってしまう。

ここで留意すべきことは、マギーの偽りの結婚の象徴は当然ながらシャーロットの偽りの結婚の象徴でもあるということだ。アシンガム夫人はこの盃を見たとき "a conscious perversity" (II:165)という印象をうけた。つまり、この盃の「歪み」は彼女ら二組の結婚がバランスの欠いたものであることを視覚的イメージとして示唆していると言える。

結局、この盃はマギーにアメリーゴを紹介することで一連の出来事の始まりを作り出した夫人によって床に叩きつけられ壊れてしまう。それ以後マギーが父親との関係を見直し、夫との真の夫婦関係を構築しようと本格的に行動し始めたことを考慮すれば、この場面で主人公マギーが三つに割れたその盃を拾う描写は極めて示唆的である。

このときマギーはその破片を一度に二つしか手にもてないことを知り、まず二つに割れた器を拾い、その後で足の部分を拾いに戻った。この行為から導き出される解釈は、金色の盃をマギー自身が認めたように彼女の結婚の象徴とするならば、器の部分は貧乏貴族である公爵とマギーの結婚であり、足の部分はそれを支えていた富豪で寛容な父親の存在であろう。また、すでに述べたようにシャーロットの立場に視点を移せば、マギーの無知という足に支えられた彼女とアメリーゴの不道徳な関係が、マギーがそれに気づくことによって崩壊したとも解釈できる。それはアメリーゴに壊れた盃を見せるマギーの"she [Maggie] *knew*, and her broken bowl was proof that she knew [. . .]." (II:183)という心の叫びからも証せられる。

このことから明らかなように、金色の盃はマシーセンが指摘したように「知識」の象徴

ともなっている。[20] ジェイムズはこの場合でも重複と逆転の技法を用いている。例えば、第一部においてマギーは世俗の付き合いも悪の存在も知ろうとせず夫の不貞についても知らなかった。一方、シャーロットはその全てを知っていたのである。しかし、第二部でマギーはそれに気づき知ろうと努め知ったのである。そして金色の盃の一件で彼女がアメリーゴの不倫に関しても知ったということを彼にほのめかすことで彼を懲らしめたのである。つまり、アダムが彼を "crystal" (I:138)と称し、ユダヤ骨董商が「ひび」のはいった水晶は「亀裂に沿って独自の法則にしたがって裂ける」と述べたごとくに、彼はマギーが直接手を下すことなく自滅したのである。[21]

一方、シャーロットに対してマギーはアメリーゴに対するのとは反対の作戦をとっている。つまり、知ったことに関して知らないふりをすることでシャーロットを不安に陥れ、ついには家族平和のための"scapegoat" (II:234)として彼女をアダムと共にアメリカに追放してしまったのである。[22] 最初に平和な家族関係の外観を整えるための自己犠牲を強いられていると感じたのはマギーであった。父親のために夫とシャーロットの裏切りを公然と非難できなかったからである。しかし、物語の結末でマギーはアメリーゴに「シャーロットを犠牲にして」新生活を始めるのだと述べている。[23] つまり彼女は知を駆使して立場を逆転させたのである。

3. 道徳と経験の階段

「知識」の問題に関連して、主人公マギーが夫を理解し真の夫婦関係を再構築するための努力は、夫の"arrogance and greed," "duplicity," "hypocrite" (I:16) といった悪を知ることであり世俗を知ることを意味している。美徳の世界に生きてきた彼女の道徳感覚は、その経験を通して当然ながら変化をみせる。ジェイムズはマギーがたどるこの一連の過程を階段のイメージを採用して描いている。

物語の導入部である第一部の冒頭で、ジェイムズは道徳性に欠けると自称する公爵に自身の道徳性を"the tortuous stone staircase – half-ruined into the bargain! – in some castle of our *quattrocento*" (I:31) と擬えさせ、その後の展開における布石を打っている。この階段を夫のいる場所を目指して降りてゆくかのように、マギーの道徳感覚は世俗を受け入れ偽善を知ることで急激に低下していく。

例えば、第二部の第四章でマギーは、父親の結婚が娘を安心させたいがためになされたと気づいた時、それを心に秘めたまま「偽善的な」微笑みを浮かべ、今後も自身の "hypocrisy" (II:83)はますます強まっていくだろうと予想している。この場面で彼女は階段を降りているのである。さらに別の例もある。マッチャムからやって来た来客たちを招待した時にも、マギーはアシンガム夫人ともに "downstairs" (II:212)に留まっている。この時、アシンガム夫人はマッチャムで勝手がわからずに辛い思いをしたため、彼らに対して "revenge"

(II:212)を試みている。このような夫人の態度に関して、マッチャムでの宴からシャーロットと夫が帰宅して以来、平和な結婚生活に異変が生じたのだと感じるマギーは夫人に同情的である。

またこの時点で明らかなことは、修道女のようなマギーの別の一面、つまり "nymph" (I:188)が残忍さとなって顕れているということである。例えば、シャーロットとアメリーゴの不道徳な関係を疑うマギーは、二人の肖像が彫り込まれた "a medallion" (II:35)を想像世界で弄んだり、のちシャーロットを "the home of eternal unrest" (II:229)である檻に閉じ込めたり、目に見えぬ絹の引き綱でアダムに引かれる彼女を想像したりしている。またアシンガム夫人を徹底的に利用してやろうという気持ちにもなっている。マギーの残忍さに関してはマシーセンが厳しく批判しているが、[24] それは社会性のない無垢な子供の残忍性に匹敵するものと考えられる。

一方、マギーが階段を降りていくのと相反して、ジェイムズはシャーロットに階段を昇らせている。例えば、アダムが彼女を旅行に誘った時、彼女は階段を昇る途中であった。また、第一部の第三章におかれた公式のパーティーの場面でも彼女は階段を昇る途中でアメリーゴを待っていたのである。

シャーロットに関して彼女の拝金主義を非難する研究者もいるが、少なくとも結婚後、彼女はアダムを愛していたのではないだろうか。[25] 彼女はアメリーゴに対して"Ah if I could have had one [Adam's babay] – ! I hope and I believe [. . .] ." (I:307)と嘆く態度をみせている。また、彼女は初めに大富豪であるアダムからの求婚を拒絶し、次にはマギーの了解を得ることを条件にアダムの申し出を受諾している。身寄りのなく貧しいシャーロットは家庭と財を得る千載一遇の機会においても、マギーに対して十分な配慮を払ったとも考えられる。

シャーロットのヴァーヴァー親子への奉仕に関して例証するならば、マギーやアシンガム夫人が認めてように、彼女は三輪では走れぬ "family coarch"の "complement of wheel" [I:23]の立場を受け入れ、アダムとマギーのために二年もの間、社交を一手に引き受けて走り続けてきたことである。最終的に彼女は母国アメリカに美術館の創設を計画する夫アダムのために、ひいては家族平和のために犠牲となって愛するヨーロッパを離れアメリカへ渡ることも別の一例であろう。したがって、貧しい孤児として世俗の苦労を知るシャーロットはアダムとの結婚を機に結果的に徳をつむ経験をしたのだと考えられる。しかしながら、ヴァーヴァー親子の執着に加え、アダムとの子供に恵まれなかったことで、彼女は階段を昇るのをやめてしまったのだと思える。

ここで留意すべき問題は、夫の不貞にマギーが気づいて以来、彼女とシャーロットは道徳の階段を昇降したのではないということである。例えば夫の不義を知った後のマギーの道徳感覚は急激な低下している。一方、シャーロットは「贖罪の羊」となってアメリカへの渡り、突如として徳の高み持ち上げられている。この点に関しては、アメリーゴがヴァー

ヴァー親子の道徳感覚は「彼らの所有する十五階建ての建物に備え付けられた"lightening elevator" (I:31)で一気に人を高みに持ち上げる」と述べた言葉がこの問題に対する妥当な答えを示唆している。つまり、マギーはアメリーゴとシャーロットの不道徳な関係を知った後、階段を降りるのをやめエレベーターによって一気に降下し、一方のシャーロットをエレベーターに乗せ一気に昇らせたのである。

ジェイムズは「金色の盃」を結婚と知識の二つの象徴としたように、階段についても「道徳感覚」に加えて彼女らの「経験」に対する態度の象徴として重ねて用いていると考えられる。マギーの場合、第一部の第三章で社交が苦手な彼女はパーティー会場の階段を昇ったところで家に残した父親が心配になり階段を降りてしまう。また第二部の第四章でも父親を犠牲にできないだろうかと考えながら、階段を降りる途中で立ち止まり結局のところできないのだと考えている。一方、シャーロットは第一部の第三章でマギーの留守中にアメリーゴを訪問した時、息を切らして一気に階段を駆け上がっている。そして彼を説得しヴァーヴァー親子の幸せな生活を守るという神聖なる理由をつけてアメリーゴと特別の関係を結ぶのである。

結　び

これまで考察してきたように、マギーとシャーロットの性格や過ち、その結果として生じた誤りの夫婦関係と調和を欠いた家族関係、それを是正するマギーの努力、一連の経験を通して変化する彼女らの道徳感覚を、ジェイムズは「歪んだ真珠」「金色の盃」「階段」のイメージや象徴を用いて二重にあるいは三重にも重ねて用いている。また一つのイメージは二重の象徴としての役割を果たしている。それらは全て「有機的なつながり」をもって一貫しこの物語の主題を見事に描き出している。[26]

小説全体の構成に関していえば、マギーとシャーロットという対照的な性格と生い立ちならびに彼女らの相対する経験を示唆するように反転の様相を呈している。いわば鏡の論理が小説全体を支配しているように思える。

ジェイムズはこの作品につけた序文の中で、"We see very few persons in "The Golden Bowl," but the scheme of the book, to make up for that, is that we shall really see about as much of them as a coherent literary form permit."と述べている。[27] この言葉の示唆する通り、*The Golden Bowl* は重複の技法や構成の確かさによって密度の高い作品に仕上がっている。

註

本稿における *The Golden Bowl* からの引用は、すべて *The Golden Bowl* (1904). 2 vols.

New York: Charles Scribner's Sons, 1937. Tokyo: Hon-no-Tomosha. 1997. により、本文中には巻数と頁数のみを記すこととする。

1. James, "The Art of Fiction." *Partial Portraits*, 381; "Literature should be either instructive or amusing, and there is in many minds an impression that . . . artistic preoccupations, the search for form, contribute to neither end, interfere indeed with both."
2. Wharton, "A Backward Glance," *The Complete Works of Edith Wharton*, Vol. XXIII, 323 – 324.
3. Leavis, *The Great Tradition*, 165-166.
4. James, "The Art of Fiction." *Partial Portraits*, 400; "The story and the novel, the idea and the form, are the needle and thread, and I never heard of a guild of tailors who recommended the use of the thread without the needle, or the needle without the thread."
5. James, *The Art of the Novel*, 392.
6. Ward, *The Search for Form: Studies in the Structure of James Fiction*, 203-206.
7. 例えば Quentin Anderson は主人公 Maggie Verver を愛によって夫を改悛させる救世主に匹敵する人物と擬えている。一方、Oscar Cargill や F. R. Leavis はヴァヴァー親子が美術品を蒐集するがごとくに配偶者を獲得する態度を非難し、Charlotte Stant に同情を寄せている。
8. James, *The Golden Bowl*, II-5.
9. James, *The Complete Notebooks of Henry James*, 74-75.
10. James, *The Art of the Novel*, 42-43. ニューヨーク版選集の *The Portrait of a Lady* 序文の中で、ある特定の性格を持つ人物から物語が始まることをジェイムズは Ivan Turgenev の教訓として述べている。
11. Quentin Anderson, *The American Henry James*, 184.
12. Winner, *Henry James and the Visual Arts*, 143.
13. James, *The Golden Bowl*, 259; "And the great things is, as they say, to 'know' one's place.
14. James, *The Golden Bowl*, 259; "Certainly I [Charlotte] have to arrange."
15. Tintner, *The Museum World of Henry James*, 209-215. ティントナーはこの三つの陶器が 1885 年にジェイムズが訪問した Ferdinand de Rothschild 家所有のフランスのファイヤンス焼きであると推測しシャーロットは誤った解説をしたと指摘している。
16. James, *The Golden Bowl*, I-312. シャーロットはマギーの留守を狙ってアメリーゴを訪問し、独身時代と変わらずに常に一緒にいるヴァーヴァー親子の幸せな生活を守るという大義名分を立てに二人の自由を謳歌しよう説得する。ついに彼は "It's sacred." と述べ、彼女はそれに同意する。
17. 『〔地図で読む〕ヴィクトリア女王時代のロンドン』87.
18. James, *The Complete Notebooks of Henry James*, 146. "The Marriages"は 1891 年、*the Atlantic Monthly* に発表された短編。ニューヨーク版選集 18 巻(1909)に収録されている。
19. Matthiessen, *Henry James: The Major Phrase*, 85; Frederic C. Crews, *The Tragedy of Manners: Moral Drama in the Later Novels of Henry James*, 103.
20. Matthiessen, *Henry James: The Major Phrase*, 85.
21. James, *The Golden Bowl*, I-116-117. シャーロットが水晶でできている金色の盃にひびが入っていることに関して売り手のユダヤ骨董商に尋ねた時、彼は "It [crystal] splits – if there is split." "On lines and by laws of its own."と答えている。
22. Tintner, *The Museum World of Henry James*, 159. ティントナーはこの場面における「贖罪の羊」の描写はジェイムズが少年時代に見た William Holman Hunt の *The*

Scapegoat であるとしている。

23. James, *The Golden Bowl*, II-346; "It's as if her [Charlotte] unhappiness had been necessary to us [Maggie and Amerigo] – as if we had needed her, at her own cost, to build us up and start us."
24. Matthiessen, *Henry James: The Major Phrase*, 100.
25. 例えば Quentin Anderson はアメリーゴにマギーの財産を手に入れるように仕向けているという理由でシャーロットを "a second Kate" と称している (Quentin Anderson, *The American Henry James*, 298)。Kate はジェイムズが 1902 年に刊行した *The Wings of the Dove* の登場人物で、恋人の Densher と共謀して主人公 Milly の財産を奪おうとする女性。
26. James, "The Art of Fiction." *Partial Portraits*, 400.
27. James, *The Art of the Novel*, 330-331.

参考文献

<Primary Sources>

James Henry. "The Art of Fiction." *Partial Portraits*. Michigan: The University of Michigan Press, 1970.

———. *The Art of the Novel: Critical Preface*. Ed. R. P. Blackmur. New York: Charles Scribner's Sons, 1934.

———. *The Complete Notebooks of Henry James*. Ed. Leon Edel and Lyall H. Powers. New York: Oxford University Press, 1987.

———, *The Golden Bowl*. 2 vols. 1904. New York: Charles Scribner's Sons, 1937. Tokyo: Hon-no-Tomosha, 1997.

———, *The Wings of the Dave*, 2 vols. 1902. New York; Charles Scribner's Sons, 1937. Tokyo: Hon-no-Tomosha, 1997.

<Secondary Source>

Anderson, Charles R. *Person, Place and Thing in Henry James's Novels*. Durham: Duke University Press, 1977.

Anderson, Quentin. *The American Henry James*. New Brunswick: Rutgers University Press, 1957.

Beach, Joseph Warren. *The Method of Henry James*. Philadelphia: Albert Saifer, 1954.

Bewley, Marius. *The Eccentric Design*. London: Chatto and Windus, 1959.

Edel, Leon and Powers, Lyall H., ed. *The Complete Notebooks of Henry James*. New York: Oxford University Press, 1987.

Gale, Robert L., ed. *Henry James Encyclopedia*. New York: Greenwood Press, 1989.

Cargill, Oscar. *The Novels of Henry James*. New York: The Macmillan Company, 1961.

Crews, Frederic C. *The Tragedy of Manners: Moral Drama in the Later Novels of Henry James*. Connecticut: Archon Books, 1971.

Leavis, F. R. *The Great Tradition*. London: Chatto & Windus, 1950.

Matthiessen, F. O. *Henry James: The Major Phase*. New York; Oxford University Press, 1946.

Tintner, Adeline R. *Henry James and the Lust of the Eye*. Baton Rouge: Louisiana State University Press, 1933.

———. *The Museum World of Henry James*. Michigan: UMI Research Press, 1986.

Ward, J. A. *The Search for Form: Studies in the Structure of James's Fiction*. Durham; The University of North Carolina Press, 1967.

Wharton, Edith. *The Complete Works of Edith Wharton*. Vol. XXIII. Eds. Yoshie Ita-

bashi & Miyoko Sasaki. Kyoto: Rinsen Book Co., 1988.
Winner, Viola Hopkins. *Henry James and the Visual Arts.* Charlottesville: The University Press of Virginia, 1970.
『〔地図で読む〕ヴィクトリア女王時代のロンドン』小池滋訳　東京：本の友社　1997年